

ポライトネスから見たスピーチレベルの男女差

— 『日本語話し言葉コーパス (CSJ)』の
「自由対話」を資料として—

呉 秦 芳

1. はじめに

これまでの日本語教育における敬語指導は、例えば、先生には「召し上がる」、友達には「食べる」など、文レベルにおける場面や相手による使い分けに焦点を当てたものがほとんどであった。しかしながら、実際の会話では、同じ会話の中でも、スピーチレベルの混用が観察される。しかも、それは無意味で不規則的な混用ではなく、談話管理上の機能を有した、規則的とも言えるスピーチレベルのシフトであることがわかる。

本研究は現代日本語の大規模な自発音声データベースである国立国語研究所の『話し言葉コーパス』(英名はCorpus of Spontaneous Japanese;これを省略してCSJと呼ぶ)を利用し、その中の「自由対話」でスピーチレベルを選択、シフトしていく様相を記述的に分析したケーススタディである。また、Brown&Levinsonのポライトネス理論の観点から、文字化した対談の資料における、各スピーチレベルの出現頻度とその特徴、(2)対話者の性別との影響からの、量的・質的分析及び考察を行った。談話レベルから日本人母語話者のスピーチレベルの実態を解明することにより、中上級の日本語学習者の待遇表現の指導に役立てようとするものである。

2. 「スピーチレベル」に関する先行研究

日本語母語話者は、状況に応じて、意識的・無意識的にスピーチレベルを巧みに使い分け、コミュニケーションをスムーズに進め、人間関係を円滑に保とうとしている。これは、Brown&Levinson(1987)の定義するポライトネスのための、一種のストラテジーとみなすことができる(Usami, 1993)。日本語学習者にとって、敬語使用の原則には示されていない、この状況に応じたスピーチレベルの使い分けこそが、最も修得が困難なものの一つである(窪田 1990)。現実の会話におけるスピーチレベルの混用、すなわち、一定の談話内におけるスピーチレベルシフトというような、文レベルを超えた談話レベルの側面からも、敬語使用のメカニズムを明らかにしていく必要がある。

談話レベルの観点から、相互行為の中で対人関係上の配慮を示しながらコミュニケーションを遂行する様相を探求する先行研究として、母語話者同士の会話を資料に、スピーチレベル、シフトの起きる条件、シフトの果たす機能を焦点に分析した研究が数多くある。(三牧 1993、1997、2000、2002 宇佐美 1995、岡本 1997、伊集院 2004 等)。しかし、これらの先行研究には、被験者の年齢が統制され

ていない、会話の組み合わせの性差が考慮されていない等の問題があるようである。本研究ではこれらの点に配慮し、分析対象データの条件を統制し、日本語母語話者の条件をできる限り同一に設定した上で分析を行う。

3. 調査方法

3.1 「CSJ」とは

「CSJ」とは、国立国語研究所、通信総合研究所、東京工業大学の三者が共同開発した現代日本語の話し言葉研究用のデータベースである(前川2004)。これは自発性の高い独話(モノログ)を主対象としており、学会等における口頭発表の音声300時間分(以下「模擬講演」、その他(インタビュー・対話・朗読など)から構成される。

3.2 会話データの収集

(表1)の通り、データ数は、母語場面8会話で、発話者はいずれも20代~30代、出身地は東京近圏、初対面約10分の会話である。本調査で提示した会話例はCSJにおける「自由対話(接触場面8会話)」から収集されたものである。具体的な内容は、話題の制約なしに、10分程度、自由に対話を行うものである。角括弧はデータIDを、左端の数字は行番号を、L/Rは話者IDを示す。文字化の方法としては、「改定版:基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese:BTSJ)」(宇佐美2007)に従う。

インタビュアーに関して、20代は1名で、30代の女性は2名である。ここからは、発話の「機能や効果」を押さえながら、談話レベルで分析していく。「CSJ」から取得したしたインタビュアー(これを省略してLと呼ぶ)と応答者(これを省略してRと呼ぶ)のデータは次の(表1)の通りである。

(表1)「CSJ」に取材したインフォーマントの背景¹⁾

ファイル		インタビュアー(I) (出身地・年齢)	応答者(R) (出身地・年齢)
女-男 L-R	D03M0004	神奈川県 30代	神奈川県 20代
	D03M0017	埼玉県 20代	埼玉県 20代
	D02M0037	東京都 30代	神奈川県 30代
	D02M0053	神奈川県 30代	北海道 20代
女-女 L-R	D03F0008	神奈川県 30代	神奈川県 30代
	D03F0040	東京都 30代	神奈川県 30代
	D03F0045	神奈川県 30代	神奈川県 20代
	D03F0058	埼玉県 20代	東京都 30代

3.3 分析基準

「CSJ」に取材した8会話を文字化し、発話ごとにスピーチレベルをコーディングしてExcelで集計した。日本語においてスピーチレベルマーカーが主に述語で現れるため、本研究では国立国語研究所(1987)に基づき、発話文を実質的発話と相槌的発話に分け、前者の発話文末を分析の焦点とした。

スピーチレベルシフトに関する先行研究では、デス・マス体とダ体の2種か、この2種に中途終了型を加えて3種か、またデス・マス体、ダ体、尊敬語・謙譲語の3種に分類されることがほとんどであった。しかし、同じスピーチレベルであっても、発話末に付加される助詞によって待遇レベルに差が出るため、本研究の分析では伊集院(2004)の分類を基に筆者の修正を加えて、ダ体及びデス・マス体のスピーチレベルにさらに3種の下位分類を設け、表2に示すI型・II型・II'型(デス・マス体に属する)とIII型・IV型・IV'型(ダ体に属する)及び*型(中途終了型)の3分類計7種のスピーチレベルに分類し、それぞれの出現率と特徴を考察した。

本研究は、対話者の性別がスピーチレベルに及ぼす影響を解明するため、女性話者をベースのインタビューーとし、特に性別がどのように応答者の発話におけるスピーチレベル及びスピーチレベルシフト影響するかについて、談話レベルから見た敬語使用(デス・マス体の使用から不使用、或いは、その逆の移行)のメカニズムをBrown&Levinson(1987)のポライトネス理論を枠組みに据えて分析するものである。

(表2)スピーチレベルの分類

〈発話文末〉スピーチレベル		言語形式
デス・マス体	I型	デス・マス体の言い切り 例：～です。～でした。～ます。～ません。～ください
	II型	デス・マス体+「ね」「よ」以外の終助詞 例：～って思うんですけど。～ですし。実家は東京ですが等
	II'型	デス・マス体+終助詞「ね」「よ」 例：～でしたよ。～ですね。～ますからね。～ませんね等
ダ体	III型	ダ体の言い切り(一語文や、名詞、形容動詞の語幹で終了する発話も含む) 例：仕事した。できない。水野晴郎。彼女もバス等
	IV型	ダ体+「ね」「よ」以外の終助詞 例：面白かったから。微妙なところだけど。懐かしいな。なんだっけ等
	IV'型	ダ体+終助詞「ね」「よ」 例：～からね。音楽ね。いいね。あるよ。一番だよ。
	*型	中途終了型 ²⁾ 例：～と思って。～みたい。～っていうか。

4. データの分析と考察

各スピーチレベルの分布と特徴について、性別による差が顕著であった①スピーチレベルの出現頻度と特徴②「ダ体+終助詞」③スピーチレベルの不調和に焦点をあて、考察する。

4.1 スピーチレベルの出現頻度と特徴

会話データの詳細は(表3)(表4)の通りである。また、会話データベースを集計し、男性と女性の各スピーチレベルの出現率の平均を(図1)に示す。

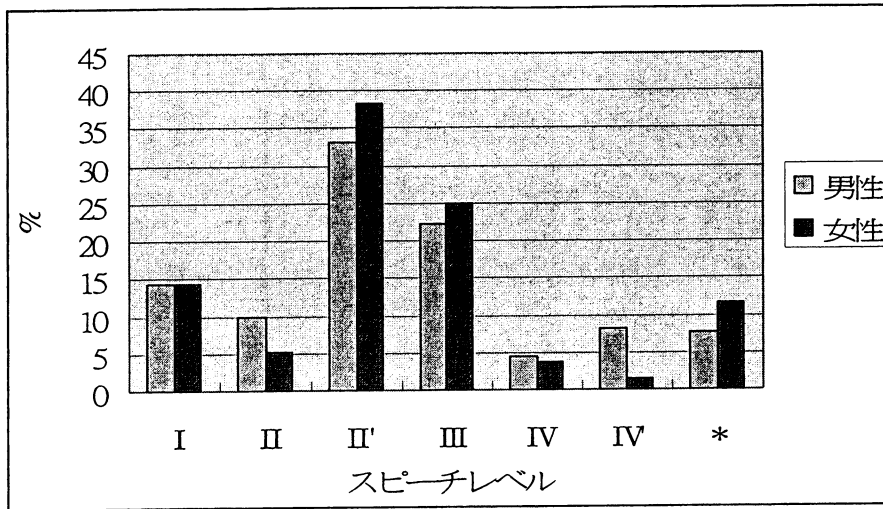
(表3) 男性の会話データ概要

会話番号	被験者	発話数	スピーチレベル内訳 発話数/出現率 (%)													
			I		II		II'		III		IV		IV'		*	
			数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
D03M0004	R	78	6	7.7	21	26.9	25	32.1	21	28.1	2	2.6	0	0	3	2.6
D03M0017	R	55	10	18.2	3	5.5	18	32.7	16	29.1	4	7.3	2	3.6	2	3.6
D02M0037	R	104	17	16.3	3	2.9	33	31.7	13	12.5	5	4.8	25	24.1	8	7.7
D02M0053	R	100	15	15.0	5	5.0	36	36.0	19	19.0	3	3.0	5	5.0	17	17.0
平均				14.3		10		33.1		22.2		4.4		8.2		7.7

(表4) 女性の会話データ概要

会話番号	被験者	発話数	スピーチレベル内訳 発話数/出現率 (%)													
			I		II		II'		III		IV		IV'		*	
			数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
D03F0008	R	65	7	10.9	1	1.5	37	56.9	8	12.3	1	1.5	0	0	11	16.9
D03F0040	R	209	39	18.6	6	2.8	88	42.1	44	21.0	8	3.8	9	4.3	15	7.1
D03F0045	R	130	25	19.2	6	4.6	40	30.7	29	22.3	11	8.4	1	0.7	18	13.8
D03F0058	R	110	10	9.0	13	11.8	26	23.6	49	44.5	1	0.7	1	0.7	10	9.0
平均				14.4		5.2		38.3		25		3.6		1.43		11.7

(図1) 男性と女性の各スピーチレベルの出現率の平均



(図1) から窺われるように、デス・マス体に属するI・II'型及び中途終了型スピーチレベル不明の*型の使用率に関して、女性のスピーチレベルは男性よりやや多く見られる傾向がある。デス・マス体の多用の点をB&Lの唱えたポライトネス理論に当て嵌めて分析すると、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー5「敬意を表明せよ (Give deference)」に該当する。女性が多用しているデス・マス体は、聞き手との間に一定の距離を置くことによって、他者に立ち入れたくないというネガティブ・フェイスに属するスピーチスタイルを示していると言える。スピーチレベル不明の*型は中途終了文で、述部まで言い切られていないため、発話末のスピーチスタイルは不明である。「ポライトネス」の観点から検討してみると、オフ・レコード・ストラテジー15「不完全にせよ・省略を用いよ (Be incomplete, use ellipsis)」のカテゴリーに当てはまると考えられる。

一方、男性はダ体に属するIV・IV'型をいずれも多用する傾向が観察できる。それはポライトネス理論のポジティブ・ポライトネス・ストラテジー4「グループ内の言語または方言の使用 (Use of in-group language or dialect)」に該当する。男性が多く使用しているダ体は他者に共感・理解されたいというポジティブ・フェイスに訴えるスピーチスタイルだと言える。

上述のような男性と女性のスピーチスタイルの相違を理解するため、以下、「ダ体+終助詞」、すなわち、ダ体にどのような終助詞が付加されているかを比較分析する。

4.2 「ダ体+終助詞」

男性と女性がダ体にどのような終助詞を付したかを話者別に以下の表5に示した。

(表5) ダ体に付加した終助詞の種類³⁾

ダ体 + 終助詞	男性				合計	女性				合計
	D03M0004	D03M0017	D03M0037	D03M0053		D03F0008	D03F0040	D03F0045	D03F0058	
ぞ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
から	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
けど	0	1	0	0	1	2	1	0	1	4
し	0	1	0	1	2	1	4	2	0	7
かな	2	2	0	1	5	0	2	5	0	7
の	0	0	0	9	9	1	0	4	0	5
な	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
っけ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
かしら	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0
や	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
さ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
わ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ね	0	2	6	25	33	5	8	1	1	15
よ	0	0	0	1	1	0	1	0	0	1
合計	2	6	6	39	53	9	17	12	2	40

全体的に、男性の会話ではダ体の発話の最後に付加される終助詞の出現頻度が高いことがわかる。女性とは異なり、男性は「話し手の聞き手への伝達態度を表す対話助詞」(伊豆原 1993) を顕著に用いる傾向が見られる。具体的にどのような終助詞が多用されているかという点、**「ね」「の」「かな」**の順であり、この三語が高頻度に出現している。一方、女性の会話では、「ね」が他の終助詞より多く用いられる傾向にあり、次いで**「し」「かな」**の順となる。ダ体に付加する助詞として、対人関係に強く関わるIV'型(「ね」の付加)という聞き手のネガティブ・フェイス(negative face)を重視する働きだと言える。また、独り言のように発話する「かな」や、断定を回避する hedge となる「し」など、いずれも「親愛表現として用いられる」(水谷 1985) と考えられ、ネガティブ・ポライトネスを表している。男性の会話の中で、二番目によく出る「の」については、Cook(1990)によれば、ポジティブ・フェイスを表すということになるが、D03M0053のデータしか現れなかったため、個人差だと言えるだろう。このように、男性と女性、両方ともネガティブ・ポライトネスを重視していると考えられる。

4.3 スピーチレベルの不調和

CSJの自由対話の中には、(表6)の通りに、文中の挿入句と文末のスピーチレベルが調和しない発話も観察された。スピーチレベルの不調和に関して、男性の方が出現率が高いと観察された。それに対して、女性の挿入句は男性の半分しか出なかったことが明らかとなった。

(表6) スピーチレベルの不調和

会話番号	男性				合計	女性				合計
	D03M004	D03M017	D03M037	D03M053		D03F008	D03F040	D03F045	D03F058	
不調和文	4	2	5	4	15	4	0	3	0	7

まず、(例1) の例を見てみよう。

(例1) (D02F0025 のデータより)

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
146	121	*	R	で、そういう変化が益々ね。
147	122-1	/	R	アノー、
148	123	*	L	ーン。
149	122-2	/	R	どんどん強まっていくん じゃないか 、
150	124	*	L	ーン、ーン。
151	122-3	*	R	大きくなっていくんじゃないかなっていう気が するんですよ 。
152	125	*	R	そうすると一生懸命、こうやって。

149行目の122-2のR「どんどん強まっていくんじゃないか、」はダ体を使用しており、相手との心理距離を近くするため努力している様子が見られる。そのあと、151行目の122-3R「大きくなっていくんじゃないかなっていう気がするんですよ」になると、相手を意識して、デス体に変えたことを示している。

5. おわりに

以上の結果を総合的に考えると、CSJの課題指向対話における男性と女性に見られたスピーチレベルの特徴を以下のようにまとめることができる。

(1) デス・マス体に属するI・II'型及び中途終了型スピーチレベル不明の*型の使用率に関して、女性のスピーチレベルは男性より多い。それは他者に立ち入れたくないというネガティブ・ポライトネス・ストラテジー5「敬意を表明せよ (Give deference)」に訴えるスピーチスタイルであると見なされる。スピーチレベル不明の*型、つまり、中途終了型はオフ・レコード・ストラテジー15「不完全にせよ・省略を用いよ (Be incomplete, use ellipsis)」に当てはまると考えられる。それに対し、男性が多く使用

しているダ体は他者に共感 理解されたいというポジティブ・フェイスに該当するスピーチスタイルだと言える。

(2) ダ体に付加する終助詞の種類と出現頻度に関して、男性は女性よりはるかに多く、顕著な相違が見られる。男性は女性より聞き手への伝達態度を強く訴える気持ちが強いと窺われる。その付加する終助詞の種類を詳しく探ってみると、男性は女性と同様、断定を回避する傾向が見られ、聞き手のネガティブ・フェイスを重視すると考えられる。

(3) スピーチレベルの不調和に関して、男性の方が出現率が高いと観察された。それに対して、女性の挿入句は男性の半分しか出現しなかったことが明らかとなった。

今回の調査では、男性と女性、それぞれ4名と少人数であったが、今後はさらにデータ数を増やして、本研究結果の信頼性の検討、修正を行いたい。

付記

本稿は、『2009年日語教學國際會議論文集』（台湾 東吳大学会場）（2009年11月）の内容に加筆・修正を施したものであり、97年度行政院国家科学委員会研究費による新進人員專題研究「由 DP (Discourse Politeness) 理論觀點來觀察日本人母語話者談話的基本狀態」（計画番号 NSC97-2410-H-364-010、研究代表者：呉秦芳）の研究成果の一部である。

注

- 1) インタビュアー(L)と応答者(R)のペアについて、ファイル名のFは女性と女性を指すが、ファイル名のMは女性と男性を表す。年齢、性別、出身地の変数を配慮しているので、CSJに含まれる対話データからD03M0004、D03M0017、D03M0037、D03M0053、D03F0008、D03F0040、D03F0045、D03F0058の8対話を標本として選び、小規模コーパスを作成した。従ってこれは、無作為抽出ではない。
- 2) 「中途終了型」発話とは、述部まで言い切られていないにも関わらず、意図した情報の伝達が終了している発話を表す(宇佐美 1995)。
- 3) (表5)は、「(の)かな」は「かな」、「(よ)ね」「(の)ね」「(けど)ね」「(から)ね」は「ね」、「(の)よ」は「よ」としてカウントした。

参考文献

(日本語文献)

- 伊集院郁子 (2004) 「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け—母語場面と接触場面の相違—」『社会言語科学』6-2, 12-26, 社会言語科学会
- (2007) 「接触場面に見られるスピーチレベル及びスピーチレベルシフト—中国台湾人学習者の初対面会話データの分析から—」『台湾 元智大学ワークショップ 談話コーパスの構築とその利用』第一部会話部会
- 伊豆原英子 (1993) 「『ね』『よ』再考—『ね』『よ』のコミュニケーション機能の考察から—」『日本語教育』80 103-114 日本語教育学会

- 宇佐美まゆみ (1995) 「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『昭和女子大学近代文化研究所』学苑 662
- (2005) 「ジェンダーとポライトネス—女性は男性よりポライトなのか?—」『日本語とジェンダー』五 日本語ジェンダー学会
- 宇佐美まゆみ・木林理恵 (2007) 「改定版：基本的な文字化の原則」(Basic Transcription System for Japanese:BTSJ) 『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成 15-18 年度科学研究費補助金基盤研究 B(2) 研究成果報告書
- 岡本能里子 (1997) 「教室談話における文体シフトの指標的機能—丁寧体と普通体の使い分け」『日本語学』16-3 明治学院
- 窪田富男 (1990) 『敬語教育の基本問題(上)』国立国語研究所
- 前川喜久雄 (2004) 『『日本語話し言葉コーパス』の概要』『日本語科学』15
- 水谷信子 (1985) 『日英比較 話しことばの文法』くろしお出版
- 三牧陽子 (1993) 「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」『大阪教育大学紀要』第 I 部門 第 42 巻 第 1 号
- (1997) 「対談における FTA 軽減ストラテジー待遇レベルシフト」『大阪教育大学紀要第 I 部』42-1:39-51
- (2000) 「丁寧体基調の談話にみる独話的発話 直接引用・心情の直接表出—『働きかけ方式』のポライトネス・ストラテジーとして」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』4:33-49
- (2002) 「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示—初対面会話における『社会的規範』と『個人のストラテジー』を中心に」『社会言語科学』5-1:56-74
(英語文献)
- Brown, Penelope and Levinson, Stephen. (1987(1978)) Politeness: Some Universals in Language Usage (reissued) Cambridge University Press
- Cook, H. M. 1990 An indexical account of the Japanese sentence-final particle no. Discourse Processes, 13, Pp. 401-439
- Usami, M. 1993. Politeness in Japanese dyadic conversations between unacquainted people: Influence of power asymmetry. Paper presented at the 10th World Congress of Applied Linguistics. Amsterdam. August 8-14

CSJ 関連 URL: http://www2.kokken.go.jp/~csj/public/index_j.html